

長野県木曾郡木曾福島町

すい む じん じや ふ きん

水無神社附近遺跡

— 県立木曾養護学校建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

(縄文時代前期後半～中期初頭)



1996年3月

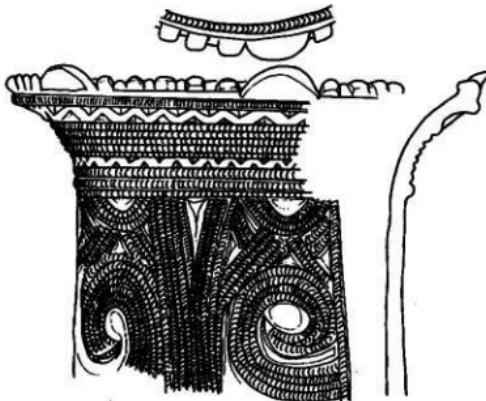
長野県土地開発公社
木曾福島町教育委員会
木曾郡町村会

長野県木曾郡木曾福島町

すい む じん じや ふ きん
水無神社附近遺跡

—県立木曾養護学校建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

(縄文時代前期後半～中期初頭)



1996年3月

長野県土地開発公社
木曾福島町教育委員会
木曾郡町村会

はじめに

木曽谷住民の長年の要望であった県立木曽養護学校建設が木曽福島町伊谷にきまつた。水田地帯で遺物採集はできない場所であるが水無神社附近遺跡が知られているので、関係者立ち合いの現地協議の結果試掘調査したところ遺物の出土があり、水無神社附近遺跡の広がりの中に入っていることが確認できた。

長野県教育委員会文化課の指導で記録保存のための緊急発掘調査をすることになり、長野県土地開発公社の委託をうけて木曽福島町教育委員会が調査することになった。発掘調査は木曽郡町村会新谷和孝氏の指導で地元住民や発足したばかりの木曽シルバー人材センターの方々が作業員としてすすめられた。

5月から8月にかけての炎天下、汗を流し黙々と調査されている姿を見て本当に御苦労様と思った。草かきで土をけずると土器片や石器が出土し、その発見が調査の喜びであると作業されている方々が話された。調査の結果、平安時代住居址3、縄文時代住居址3、堀立柱建物2等の遺構を検出できた。町内ではこれだけの調査は初めてであり、町の歴史を知る上で貴重な発見となった。関係者の話によると縄文時代前期末の住居址は木曽では最初の発見であり、出土した土器には木曽川を通じて往来を示す西日本の土器があって全県的にも注目されるという。

こうした貴重な成果を得たのは、ご指導下さった先生方、作業に従事された方々、長野県教育委員会、長野県土地開発公社をはじめとする多くの方々のご協力のお陰と厚く感謝の意を表します。

平成8年3月

木曽福島町教育委員会

教育長 樋口清

この報告書の約束ごと

1. 県立木曾養護学校建設予定地が水無神社附近遺跡に入るかについて、関係者立ち合いで現地協議し、結果、試掘調査することになり、試掘調査の結果、遺跡であることが確認された。
2. 遺跡であるため、その保存について工事着工前に記録保存のために緊急発掘調査することになり、その調査結果の報告書である。
3. 発掘調査は長野県土地開発公社と木曾福島町教育委員会が委託契約を結び、木曾福島町教育委員会が発掘主体者となり、発掘調査を実施した。
4. 木曾郡埋蔵文化財調査委託実施要綱により、木曾郡町村会と木曾福島町教育委員会で技術指導委託協定書を結び、発掘調査、整理作業の報告書執筆を委託した。
5. 発掘調査担当者は木曾郡町村会新谷和孝がなった。
6. 発掘調査、整理作業は新谷が指導してすすめてきた。報告書執筆となった平成8年1月に病気となり、長期療休に入り執筆できなくなった。そのため急きょ神村透と松原和也が対応することになった。
7. 調査中の記録がないため、出土遺物と図面をもとに短時日にまとめることになったので、本来の記録保存の報告書としては不十分な内容となっている。
8. 出土遺物、遺構図面、写真フィルム等は木曾福島町教育委員会が保管している。

目 次

はじめに

この報告書の約束ごと

I 記録保存となる	1
II 木曾福島町と水無神社附近遺跡	2
III 検出した遺構と出土した遺物	3
IV 調査してみて	6

挿 図 目 次

第1図 遺跡附近図 (1 : 50,000)	8
第2図 遺跡附近図 (1 : 2,500)	9
第3図 全体図	10
第4図 1～3号住居址	11
第5図 4号住居址炉埋甕、5号住居址炉埋甕、遺構外出土土器	12
第6図 遺構外出土土器	13
第7図 屋外埋設土器	14
第8図 3号住居址出土土器	15
第9図 3号住居址、4号住居址出土土器	16
第10図 4号住居址、5号住居址掘立柱建物1附近出土土器	17
第11図 掘立柱建物1附近出土土器	18
第12図 遺構外出土土器	19
第13図 タ	20
第14図 タ	21
第15図 タ	22
第16図 タ	23
第17図 タ	24
第18図 タ	25
第19図 3号住居址出土石器	26
第20図 4号住居址、5号住居址出土石器	27
第21図 遺構外出土石器	28
第22図 5号住居址、遺構外出土石器	29

図 版 目 次

第1図版 遺跡遠景	30
第2図版 調査中の遺跡	31
第3図版 1号住居址	32
第4図版 2号住居址	33
第5図版 3号住居址	34
第6図版 4号住居址	35
第7図版 炉と埋甕	36
第8図版 増立柱建物1	37
第9図版 土器	38
第10図版 土器と块状耳飾	39
第11図版 石匕と原石	40
第12図版 石器	41
第13図版 砥石と石皿	42
第14図版 凹石と原石	43

I 記録保存となる

平成5年（1993） 県立木曾養護学校の建設が木曾福島町に決まり、伊谷地区の水無神社前の水田地帯の用地買収が長野県土地開発公社の手ですすめられた。古くからの水田地帯であるため遺物探査はできないが、東側の畑地帯では遺物が採集され水無神社附近遺跡として知られている。隣接地域であることもあって長野県教育委員会、長野県土地開発公社、木曾福島町教育委員会そして木曾町村会の関係者が立ち合い現地協議をした。八沢川の北にあって南面する日当りのよい地形からみて遺跡の可能性があり試掘調査することになった。

試掘調査は木曾福島町教育委員会からの委託をうけて木曾郡町村会が実施した。平成6年1月12日から14日にかけて重機を使い、用地内の全水田に53か所のトレンチを入れた所、水無神社への参道に沿った西半分に遺物の出土と包含層を確認でき、绳文時代前期後半から中期中葉と平安時代の遺跡であることがわかり、水無神社附近遺跡に含まれた。用地内での遺跡の範囲は凡そ5,000m²と推測された（第2図）。

試掘調査の結果は長野県教育委員会文化課に報告された。検討の結果、遺跡地は用地買収されており建設地の変更はできないし、傾斜地ということもあって工法を大きくかえることができないため、緊急発掘調査をして記録保存として残すことになった。長野県教育委員会は長野県土地開発公社からの協議に対して①記録保存として発掘調査すること、②発掘調査は木曾福島町教育委員会に委託すること、と回答し、木曾福島町教育委員会には同様な内容を通知した。両者の間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」が結ばれ、さらに木曾福島町教育委員会は木曾郡埋蔵文化財発掘調査要綱により木曾郡町村会と「発掘調査技術指導委託契約書」を結んだ。結果、発掘調査、整理作業、報告書執筆は木曾郡町村会埋蔵文化財調査整理作業所が担当し、調査に関わる作業員募集、賃金支払い、器物調達等の事務的なことは木曾福島町教育委員会が担当することになった。

発掘調査は木曾郡町村会新谷和孝が担当者となり平成6年5月から8月にかけて実施した。5月から約一ヶ月は重機を使って表土と包含層を取り除き、ローム層（赤土）あるいは砂礫土上面を露呈させた。階段状に造成されていた水田の中に部分的に残されていた包含層（黒土）中に焼土を検出し、その部分はブロックとして残し、基盤層にみられた黒土の落ちこみを遺構として考え、その部分を集中して調査した。こうした表土除去は限定された日数の中での調査方法として止むを得ない手段である。

整理作業は平成6年冬、7年冬と郡下で遺跡調査のない冬期間に行なうこととした。平成6年には整理作業所がなく、上松町お宮の森裏遺跡整理作業用プレハブで、お宮の森裏遺跡の整理作業の合間に水洗るのがやっとであった。平成7年に作業所が確保され整理できるようになったが、山口村丸山遺跡の調査が急に入り12月から翌年1月まで現場に出ることになった。担当者一人で発掘調査、整理作業、報告書作成といった仕事の多年の積み重ねと、冬期の作業が追い討ちとなって心労からの病気で長期療休となってしまった。そのため報告書執筆ができなくなり、急きょ神村透、松原和也が整理作業、報告書執筆をうけもつことになった。日数も少ないとあって、内容をしづらせてまとめざるを得なくなってしまった。

調査事務局 木曾福島町教育委員会

教育長 黒石実男（～H6・6） 根井 功（H6・6～7・5） 橋口 清（H7・6～）

社会教育係長（文化財担当） 中島寿美雄（～H7・3） 小沢弘幸（H7・4～）

文化財審議委員 田中 博

調査・整理 木曾郡町村会

事務局長 上原左近 係長 田沢文章

発掘担当 主任 新谷和孝 補助員 主事 磯村賢治 松原和也 助言 嘱託 神村 透
調査作業員 稲村喜八郎 伊藤朝次郎 大宮 淳 尾崎祐次 奥田正身 上垣外勇治 田沢良一 田中寛人
中野みえ 長野スエ子 中山あや子 林下末夫 原 茂 松井敏治 松井光治 宮田甲一
宮田利彦 宮田恵美子 宮田正士 宮川忠藏 向井正弘 向井はや 村田静江 森恵八郎
安江ふじ子 安田赳夫
整理作業員 大戸美恵子 久保寺すみ子 小幡和枝 近藤登紀子 徳原とら子 丸山アツ子 横道ふさ子

Ⅱ 木曾福島町と水無神社附近遺跡

遺跡は長野県木曾郡木曾福島町伊谷（いや）1140番附近に所在する（第1、2図）。

木曾福島町は木曾郡の中心地で国や県の出先機関や県立高校も二校ある。大田水穂が「山蒼く暮れて夜露に灯をともす。木曾福島は谷底の町」と歌っているように、木曾川の両岸に山がせまっている谷間の僅かな小平地に家並が集中してある。このように木曾谷でも最も狭い所に中心地としての町が発達したのは歴史的な背景があつたため、史跡の町ともいわれている。

室町時代、木曾義仲の子孫と称する後の木曾氏が木曾谷北部に勢力をのばし、現木曾高校のある段丘先端に小丸ヶ丘城を築いた。眼下を通る木曾路を制圧し、黒川沿いの開田（かいだ）経由の飛騨高山道も、王滝川沿いの王滝経由の飛騨下呂道もおさえることができる場所としてこの地が選ばれたものと思う。やがて木曾氏は木曾谷を支配して戦国大名の一つとなり、小丸山城の木曾川対岸山頂に山城福島城を築いた。

豊臣秀吉が全国統一した時、徳川家康と共に徳川家臣であった木曾氏は千葉に移封され、間もなく家康によつて改易され木曾氏は滅んだ。開田原の戦の時、家康は木曾氏の旧家臣を呼んで木曾攻略を命じ、徳川の支配下におくことができた。その功により山村氏を木曾の代官に任せ、その陣屋が現福島小学校地に置かれた。江戸幕府は重要街道として五街道を設定した。その一つが江戸と京都を結ぶ中山道で木曾路はその一部で、宿場も11宿設けられ福島宿はその一つで、本陣は現在町役場となっている。街道を往来する人や物を取締るために関所をそれぞれの街道に設置し、中山道には長野県と群馬県境の碓氷関と、福島に福島関をおいた。福島関は福島宿の北はずれの山が最も木曾川にせまつた場所にあり、代官山村氏が管理していた。こうした戦国時代以来の歴史的伝統が谷底の町木曾福島として今日に至っている。

福島宿の南を横切って流れている川が、中央アルプスに水源をもつ八沢川で、両岸に小さな平坦地をつくり集落が点在している。その一つが伊谷で、南面する山麓に水無（すいむ）神社があり、その前一帯は川沿いでは最も広い水田地帯となっている。水無神社は飛騨一の宮である水無神社の分社で鎌倉時代末期の創建といわれ、後の木曾氏が大壇那となっている。7月22～23日の祭礼の「みこしまくり」は毎年新しく神輿をつくってはこわすもので、天下の奇祭の一つとして知られている。

平坦地の規模が小さい木曾福島町は遺跡数が少なく、いずれも小さい。その中で水無神社遺跡（長野県包蔵地台帳番号4317、町村台帳番号33）は町内最大で、縄文時代前・中・後期と継続され、平安時代灰陶器も採集されている（第1図）。八沢川に沿って上流には川上地区大垣外遺跡、正沢遺跡、駒の湯地バアゴヤ遺跡がある。水無神社から福島宿への山腹参道を少し西へいった山寄り斜面、丁度、国道19号福島トンネル真上には木曾谷唯一の江戸時代末期の福島窯跡がある。

III 検出した遺構と出土した遺物

県立木曾姫陵学校は県道福島停車場・駒ヶ岳線からの水無神社参道東側水田地帯（第2図）に建設された。遺構が検出されたのはその用地内中間部で、山麓からの傾斜地が八沢川段丘へ変換するあたりから平坦地になる所に構築され、東西に長く分布して発見された（第3図）。

新谷和孝が木曾姫陵町教育委員会に提出した「水無神社附近遺跡発掘調査の概要」によると、検出された遺構は、縄文時代前期末～中期初頭の住居址3（3～5号住）、建物2、土坑約2,000、縄文時代中期中葉の焼土11、土器を埋設した土坑1、平安時代後期の住居址3（1・2・6号住）という。

縄文時代住居址は平坦地に接する傾斜面にあって、そのため掘りこみは北側が深く南側は浅い。最も保存状況がよかったのは3号住居址で、4・5号住居址は埋め戻しの検出で確認できた。掘立柱建物址は調査区西側に2棟が並び、建物1は1×3、建物2は1×1であるが、いずれも東西に長くなっている。土坑とした穴は約2,000を数えるが、黒土を除去して残った落ちこみを全て大小深浅に関係なく数えたため、人の手によるものでないものを相当にふくめている。どこから掘りこんでいるかは確認できていないが、直径や深さから検討すると墓壙や食料貯蔵穴があり、また焼石が集中する焼石炉があったり、土器を埋めているものもあった。

焼土11というものは重機による削平中に検出された焼土で、かつての地表面と思われる。赤く焼けた焼土は大小あって屋外での営みと考えられる。新谷は縄文時代中期中葉としたが、この時期の土器はほとんどなく、前期末～中期初頭か、平安時代と考えられる。あるいはさらにさがって、水田造成時かも知れない。平坦地に中期の大規模な深鉢を正位（口を上）に埋めた土坑は注目される。

平安時代の竪穴住居址は黒土につくられていた。重機での削平中に焼石が検出され、それがカマドであることを確認して住居址であることがわかった。そのため住居址の全容を知ることができなかった。

1. 1号住居址（第4図）

北側半分を確認できた住居址で、東西3mの方形プランの竪穴住居址である。北壁中央部に石芯粘土カマドがある。北壁に接してカマドをはさんで柱穴がある。入口部にも対となる柱穴がある四本主柱の竪穴住居址と思われる。遺物はない。平安時代である。

2. 2号住居址（第4図）

北側半分を確認できた住居址で、東西4m70cmの長方形が方形プランの住居址である。東壁の中央より北にによって石芯粘土カマドがある。カマド中央に支脚石が直立している。遺物はない。平安時代である。

3. 6号住居址

2号住居址の東方12m離れた所に住居址を確認したというが、記録や図がなく不明である。

4. 3号住居址（第4、8、9、19図）

住居址 傾斜面と平坦面の転換地にあって、住居北壁は斜面を掘りこんでいるために深い。東西5m90cm、南北5m50cmのほぼ円形プランで周溝はない。北東壁外側に巾60cmから1mの棚状の掘りこみがある。これが古い住居址なのか、3号住居址に附属する壁外棚かは不明である。柱穴は壁にそって点在し、明確な規則性は

つかめない。南側壁外に「ハ」の字形に柱穴列があり、入口部施設と思われる。炉は地床炉で中央より入口部によった所にあり、炉内にピットが2つある。この住居は火災にあって焼けており、木炭が多く出土した。廃絶行為の火災とも考えられ、住居内に多量の礫の投げこみがある。

遺物 土器と石器がある。土器はいずれも小破片で、前期後半の諸磯b式（第8図1～7）が少量あって、有孔浅鉢（3～7）が3～4個体分ある。多いのは諸磯C式とその直後の土器（8～32）で、住居址はこの時期と思われる。関西系土器（第9図1～11）もあって、9～11は北白川下層式の丹彩土器である。十三菩提式（12～24）、五領ヶ台式（25～28）、北裏式（29～31）、大歳山式（32, 33）もある。33は底部で底端部を押しこんで五角形としている。石器は剥片石器が多く、石錐（第19図1～13）、石錐（14～17）、ビエスエスキュー（18, 19）、尖頭器（20）がそれである。他に打製石斧（21～24）、磨石凹石（25）がある。

5. 4号住居址（第5、9、10、20図）

住居址、3号住居址と同様に北壁は傾斜地を掘りこんでいる。重機による試掘と土塗でプランは把握できなかつたが、円形プランと思われる、床面に土器を埋めた炉（埋甕炉）があった。

遺物は土器と石器がある。土器は少量の諸磯b式（第9図34～37）、諸磯C式とその直後の土器（38～43、第10図1～13）がある。14は北白川下層式の丹彩土器である。15は器厚が薄い無文の有孔浅鉢土器である。関西系繩文土器（16, 17）、十三菩提式（18～22）、大歳山式（23）も少量ある。炉埋設土器（第5図1）は口縁と底部を欠く深鉢土器で全面に斜繩文がつく。石器は剥片石器のみで、石錐（第20図1～11）、尖頭器（12）、石錐（13）、ビエスエスキュー（14）がある。

6. 5号住居址（第5、20、22図）

住居址 水田造成で壁がけずられており、プランをつかめないが、北壁のあり方から円形プランと思われる。床面に土器を埋めた炉があった。

遺物は土器と石器がある。土器は多くなく、前半（第10図25）、五領ヶ台式（26, 27）と炉埋設土器（第5図2）がある。埋設土器は密接結節竹管文で飾られた深鉢で十三菩提式である。石器は剥片石器が多く、石錐（第20図15～22）、スクレーパー（23）、石匕（24）がそれである。打製石斧（25）、磨石凹石（26）、平板石皿（第22図1）がある。

7. 屋外埋設土器（第7図）

平坦部の砂礫土層を掘りこんで口縁部を上に直立するよう（正位）に埋めていた。口縁まであった完形土器であったが、表土排土の時にこわれてしまった。口径35cm、底径10.7cm、器高50cmの大形深鉢土器である。口縁は内湾気味に立ちあがり口縁部をつくる。口端は突帯状になり波状口縁になっていたと思われる。口縁部下端も突帯をめぐらし、連続押捺をしている。口縁部の波状口縁となる下部には間をおいて隆帯を三本おろし、押引き爪形文をつける。隆帯の間には半割竹管の背をあてての押引き沈線を二本おろす。これらの左右には半割竹管で区画した中を縦の半割竹管文でうめている。腹部はわずかにすぼまり、そこに押捺のある突帯文をめぐらし、その下部に爪形文をついた突帯で囲む上に開く梅形文がつく。波状口縁に対応する所は「X」字状に爪形文をつける突帯を交錯させている。繩文時代中期中葉の下伊都型梅形文土器である。

8. その他の遺構

調査区西端で掘立柱建物1、同2が検出されたという。掘立柱建物1は1×3間の東西に長く、この附近からは前期後半の諸磯C式土器と十三菩提式土器が出土している(10図28~30、11図)。掘立柱建物2は東西に長い1×1間である。

集石、土坑(約2000)もあり、土坑は大半は木枠と思われるが、大きさや深さ、遺物の状況から貯蔵穴や墓坑がある。一つ一つについては充分に検討できなかった。

黒面に何か所もの焼土があって、縄文時代から平安時代にかけての生活面で、それぞれの時期の野火であったと思われる。中には埋設土器もあって前期の屋外炉と思われる。

9. 遺構外出土土器

縄文時代前期、中期が多く、平安時代や近世陶磁器も少量ある。

完形ではないが器形のわかる土器がいくつかある。5図3は口径40cmの大きな土器で、外反してきた口端に貼付文をつけ、口縁近くには三角形状の刺突文を点在させる。頸部の上下に横走する竹管文をめぐらし、その間は鋸齒状に埋めている。上下の境界と三角形基部は土器面を彫りこんでいる。胴部は縄文がつくようである。十三菩提式である。6図1は粒の大きい縄文の羽状縄文が全面につく胴下半部で、西日本系の土器である。2は斜縄文を地文にして刻目のある突帯を間をおいて縱につけている胴下半部で、底部端部を押捺で凹ませ(8箇所)ており、底面は上げ底となっている。大歳山式である。3は底部下端が外に張りだす筒状の土器で、帯状に三角形、X字に文様をつくり、その帯はヘラ描き沈線で格子状に刻まれる。十三菩提式土器である。

破片が多い。そのいくつかを拓本(12~18図)にした。12図1は小破片であるが諸磯a式の特徴を示す。2~14は諸磯b式、15~35、13図、14図は諸磯C式から十三菩提式の竹管文のある土器である。15図は西日本の土器で、1、2は北白川下層式の爪形文、3~7は北白川下層式の丹彩土器である。8~27は大歳山式、28~40は両型式の縄文ある土器である。16図1~41は縄文を地文にし、半剖竹管の結節突帯をつける十三菩提式である。中期初頭土器は木曾川下流に分布する北裏式(42~49)、瀬戸内から近畿に分布する船元式(17図1~3)も少量あるが、五領ヶ台式(4~27、18図1~25)が多い。中期中葉の土器は勝坂式(26~31)、後葉(32~33)と少ない。34は土製円板である。

10. 遺構外出土石器

石器は住居址での出土と同様に剥片石器が多く、石材は黒曜石が最も多く、ついでチャート、下呂石となつていて、玄武岩もいくつかある。石錐は多いので図化しなかった。石匕は住居址からの出土は1点であったが、遺構外から10点(21図1~10)ある。1は玄武岩製のため他より大きい。4、7が下呂石で、他はチャートである。黒曜石がないのが注目される。石錐(11~18)は比較的多い方である。19はスクレーパー、20は拇指状スクレーパー、21、22は尖頭器である。23は軟玉製の完形丸状耳飾で、3.5×4.5cmのやや横に長く、厚さ5.5mmの優品である。打製石斧は小形の短冊形のものが多い。横刃石器は5点ある。磨製石斧は少なく、乳棒状磨石斧(22図2、3)2点、小形定角式磨石斧(4~6)の3点である。磨石凹石(7)は2点、磨石(8)は1点、特殊磨石(12)は1点と磨石類が少ない。10はつくりの悪い石皿である。11はよく磨かれた砥石で、裏面にはスジ状の溝もある。9は大形の打欠き石錐で、これだけ大きいものは余りみない。

注目されるのは黒曜石の原石で、最大のは13×7×6cm、重さ480gのもので、他に5~8cmの大のものが5点もある。さらに小さいものもいくつかあって、原石を採取か交換して入手し、遺跡の中で加工したらしく、剥

片やチップは非常に多い。黒曜石のもつ鋭利性からか石鎚が最も多く、石錐、尖頭器、スクレーパーがつくられている。

11. 平安時代以降の遺物

平安時代の住居址が3軒検出されたのに、住居址からの出土遺物はなかった。遺構外からは灰釉陶器、須恵器、土師器がある。灰釉陶器は縦頸壺、碗、皿、耳皿がある。須恵器は壺と甕がある。土師器は小形球形甕の甕と長胴の甕がある。

近世の陶磁器には天目碗、すり鉢、染付碗、皿などがあり、天目碗は中世のものかも知れない。すぐ近くの福島窯製品は皿が一片あるのみである。

近代のものは皿、浅鉢、湯呑み碗、急須などの陶磁器がある。

IV 調査してみて

水田地帯であるため水田造成で遺構は消滅していたと思われたが、包含層も遺構も完全ではないが残っていた。現在の土地造成と違って人手による造成のためと思われる。条件のよい地形であれば遺物採集できない水田地帯も遺跡であることを実証した。

重機を使っての大規模な排土のため黒土層中の遺構を充分に確認できなかったのは残念であるが、黒土層中にも生活面があり、竪穴住居もつくられていることを一部ではあるが確認でき、今後の調査への大きな教訓となつた。

出土土器から見ると、遺跡の時期は縄文時代前期後半から中期初頭に継続することがわかった。諸磯b式土器の時期から居住が始まり、諸磯C式土器、十三善提式土器の頃が盛期で、3軒の竪穴住居址、掘立柱建物、土坑の多くもこの時期である。中期に入って五領ヶ台式土器も当地としては比較的に多いが、住居址は調査地内では確認できなかった。中期中葉、後葉の土器も少量あるが、遺構は中葉の下伊那型郷形文土器を埋めた屋外埋設しか確認できなかった。以前の宅地造成では後期土器もあったが、今回の調査では一片も検出されず、遺跡内でも時期によって居住地域が違っていたことを示す。

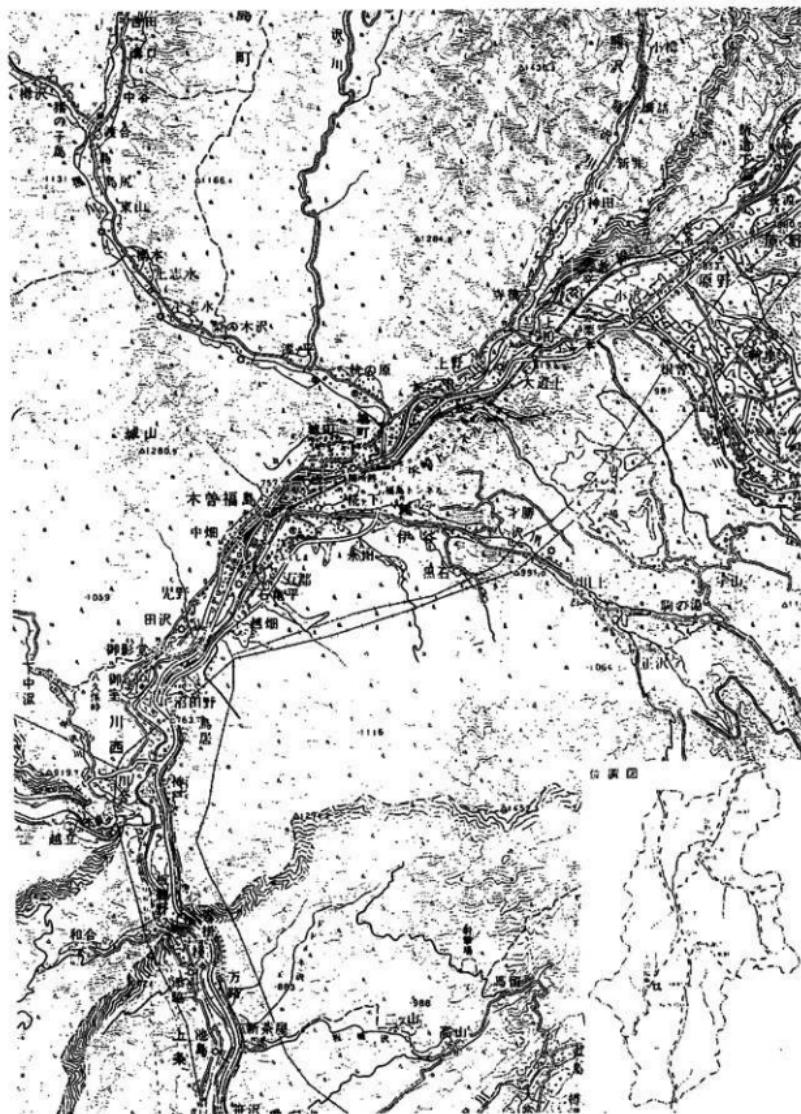
前期後半から中期初頭にかけての資料は木曾地方では表探では知られていたが、調査でこれだけの出土量と遺構を伴っていたのは最初の検出例で貴重である。これらの土器は中部高地の土器であって、松本平や諏訪地方とのつながりの強かったことを示す。同期に木曾谷ということで、木曾川を通じて美濃からさらに西日本とのつながりのあったことを示す土器が出土している。北白川下層式土器、大歳山式土器、船元式土器、北裏式土器がそれである。西日本と中部高地を結ぶルートとしての木曾谷の姿を示している。

石器を見ると、剥片石器が特に多い。中でも石鎚が多く、石匕、石錐は狩猟活動が盛んであり、解体する石匕(皮剥ぎ)、皮を加工する石錐がそれを示す。この剥片石器の大半は黒曜石製で、諏訪の和田岬附近から黒曜石を採取してきたか、交換して入手したか不明であるが原石が遺跡に特に持ち込まれ、ここで石器を加工しており、製作途次の剥片やチップが非常に多い。黒曜石の多量使用からも中部高地人の遺跡といえる。

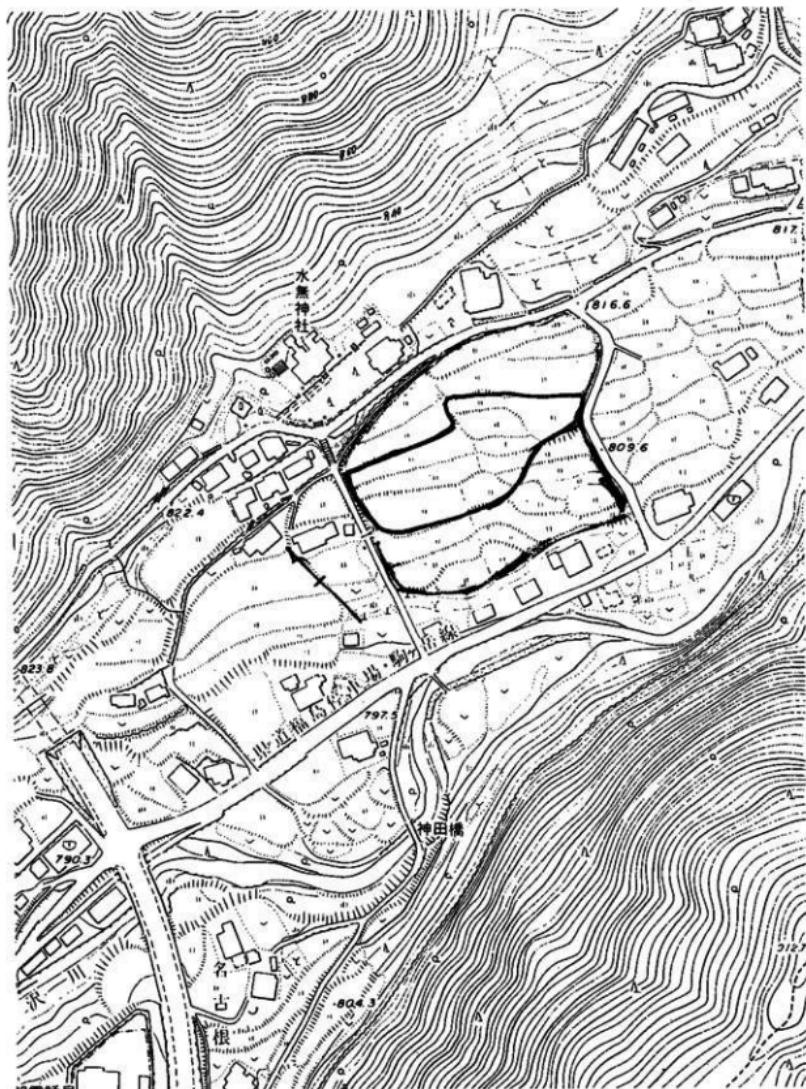
最も優れた石材である黒曜石製の石鎚、石錐は商品的な価値もあったと思われる。この石器や狩猟でとれた動物、皮革製品が交換財として木曾川下流域の人々と交流し、その結果、西からの商品と共に土器が搬入されたも

のと考える。

今回の水無神社附近遺跡の調査は、木曾では明確でなかった時期の遺構と遺物を検出できた。この資料を生かしての地域の歴史解明は今後の課題である。

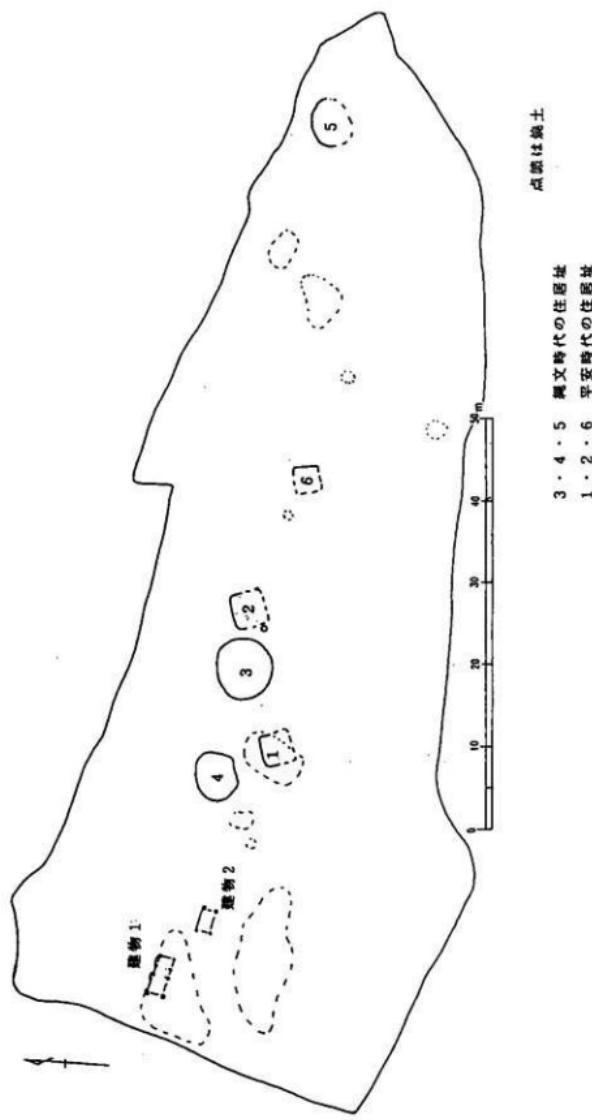


第1図 進跡附近図 (1:50,000) ×進跡

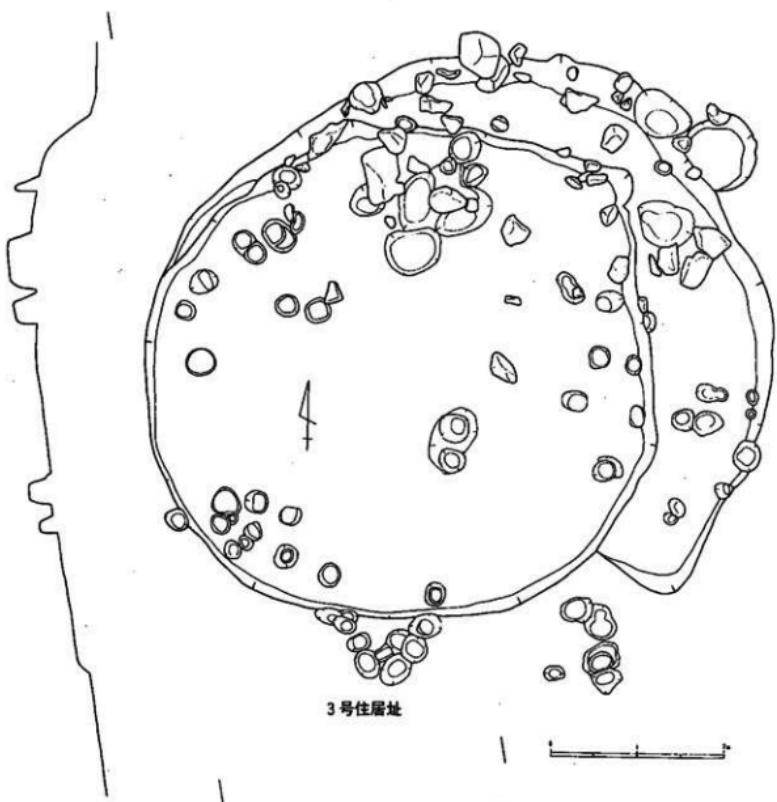
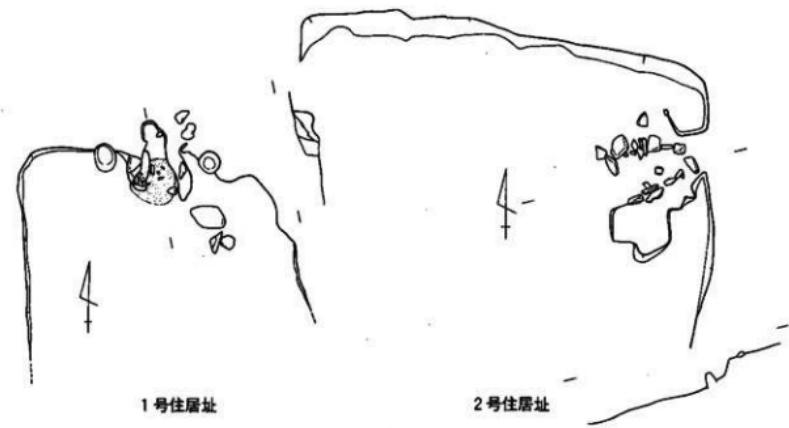


第2図 遺跡位置図 (1 : 2,500) (実線内を調査)

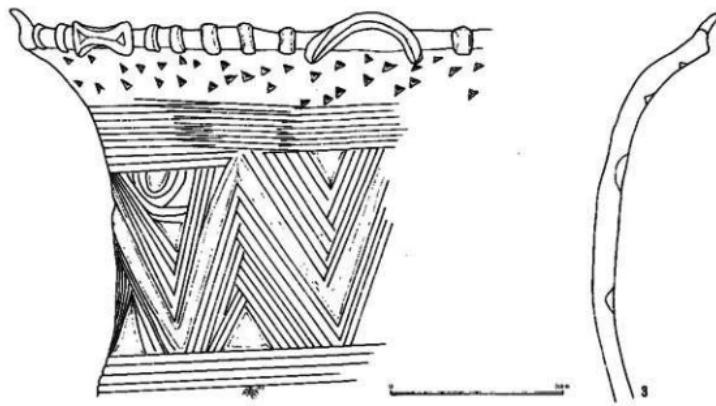
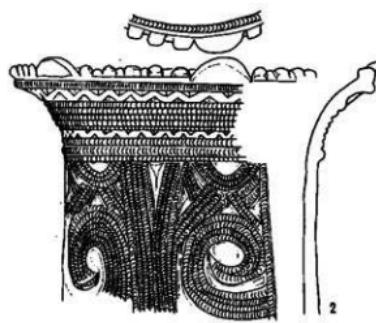
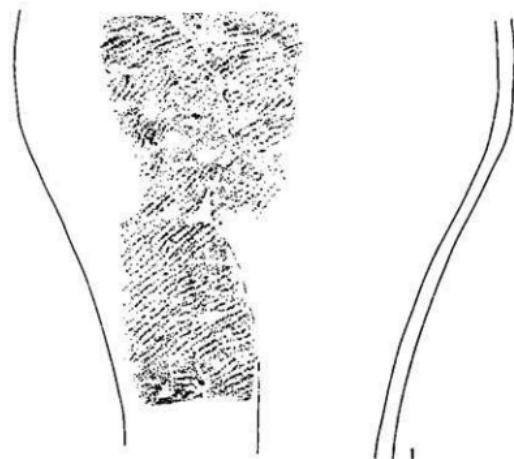
全体図



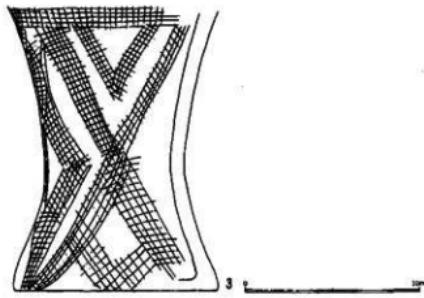
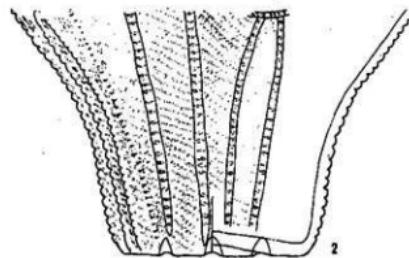
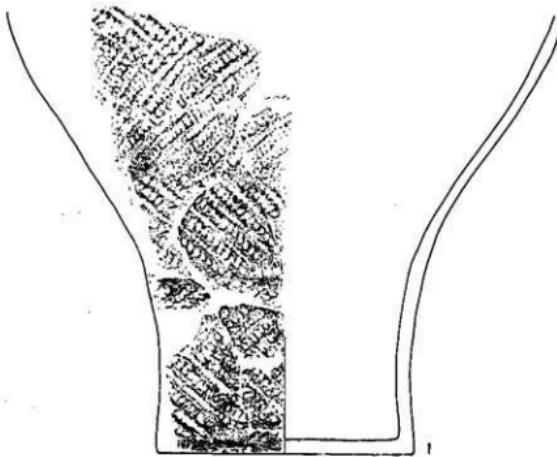
第3図 全体図



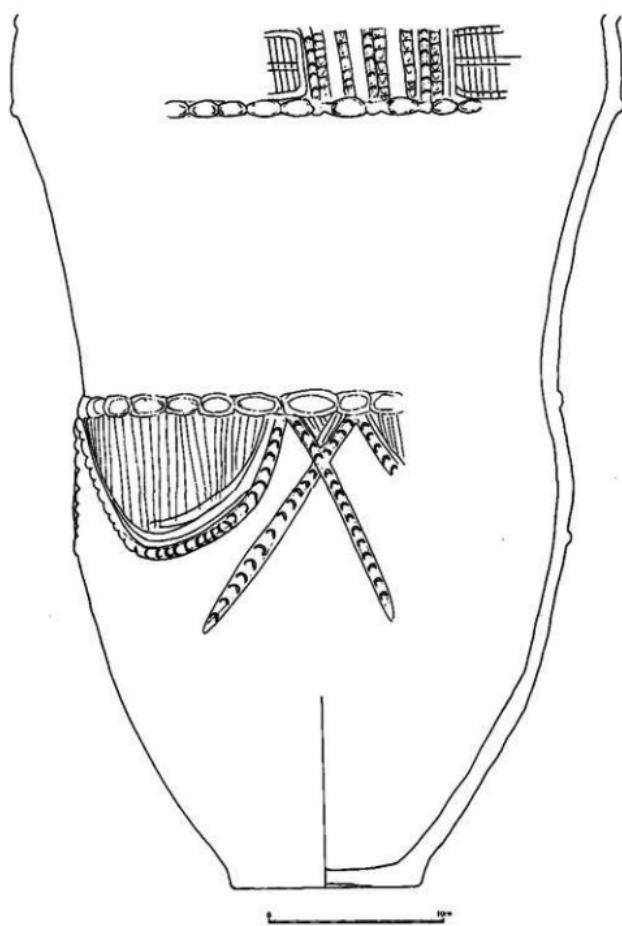
第4図 1～3号住居址 (1/60)



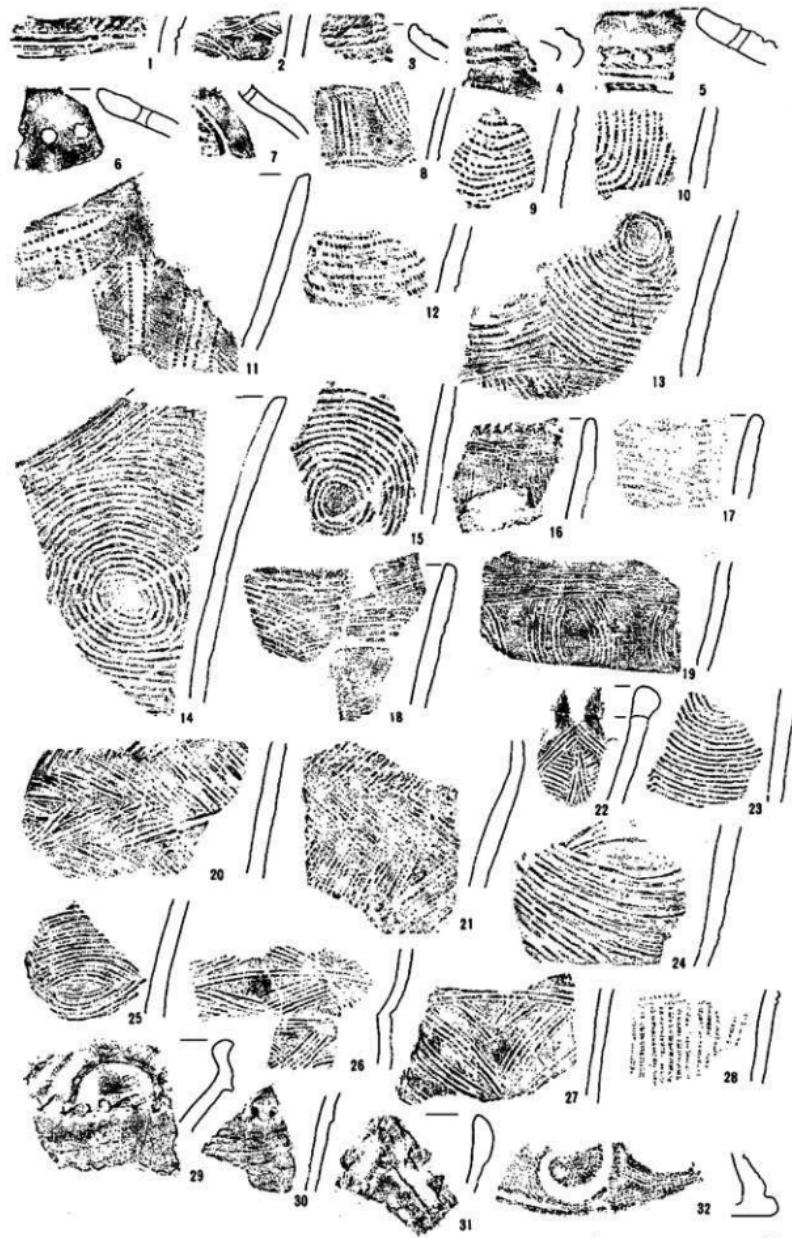
第5図 4号住居址炉埋甕 (1) 5号住居址炉埋甕 (2) 造掘外 (3) 出土土器 (4)



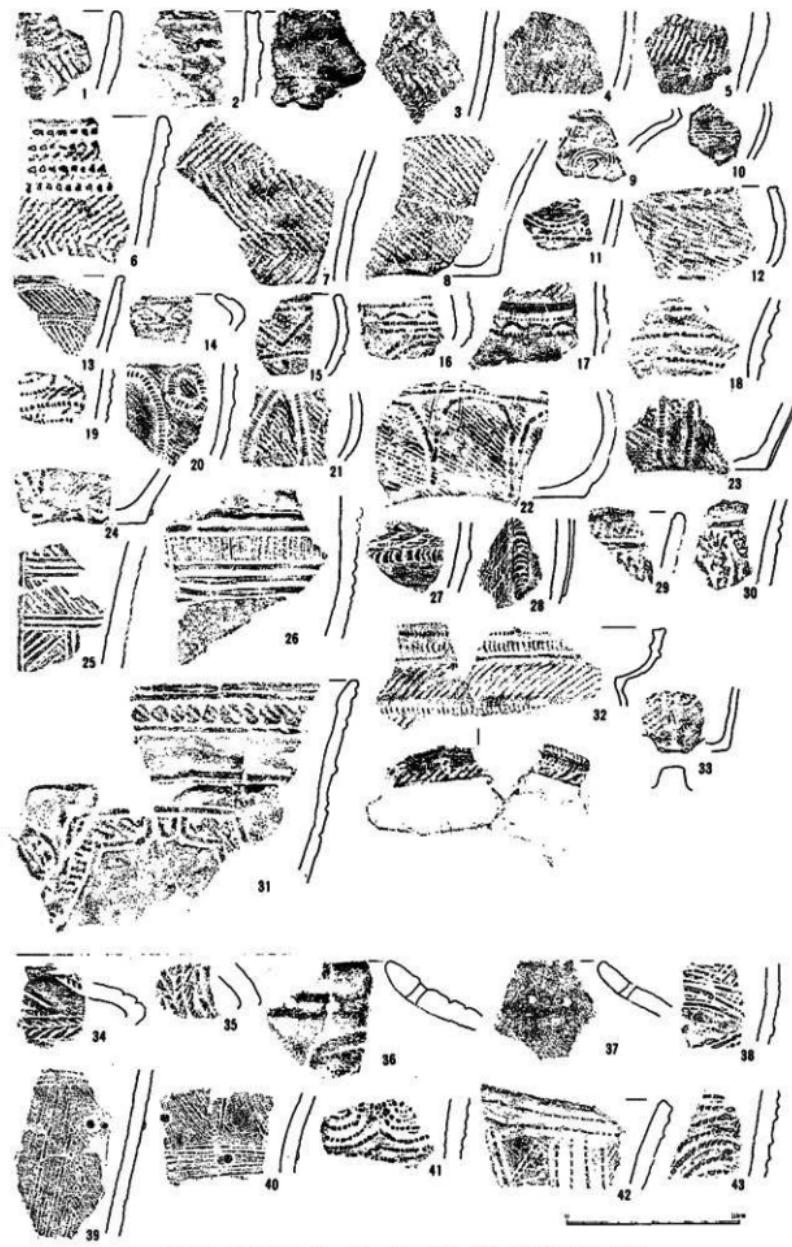
第6図 遺構外出土土器(3)



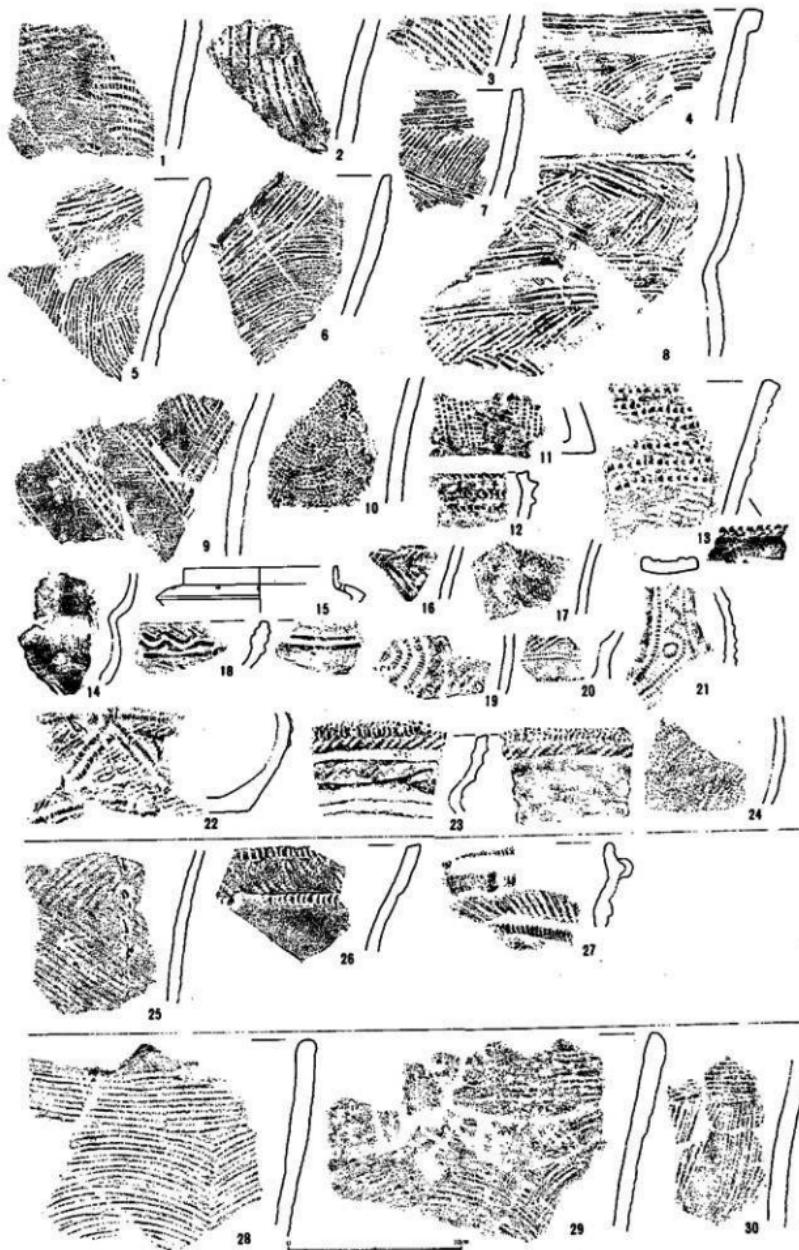
第7図 屋外埋設土器(少)



第8号 3号住居址出土土器(%)



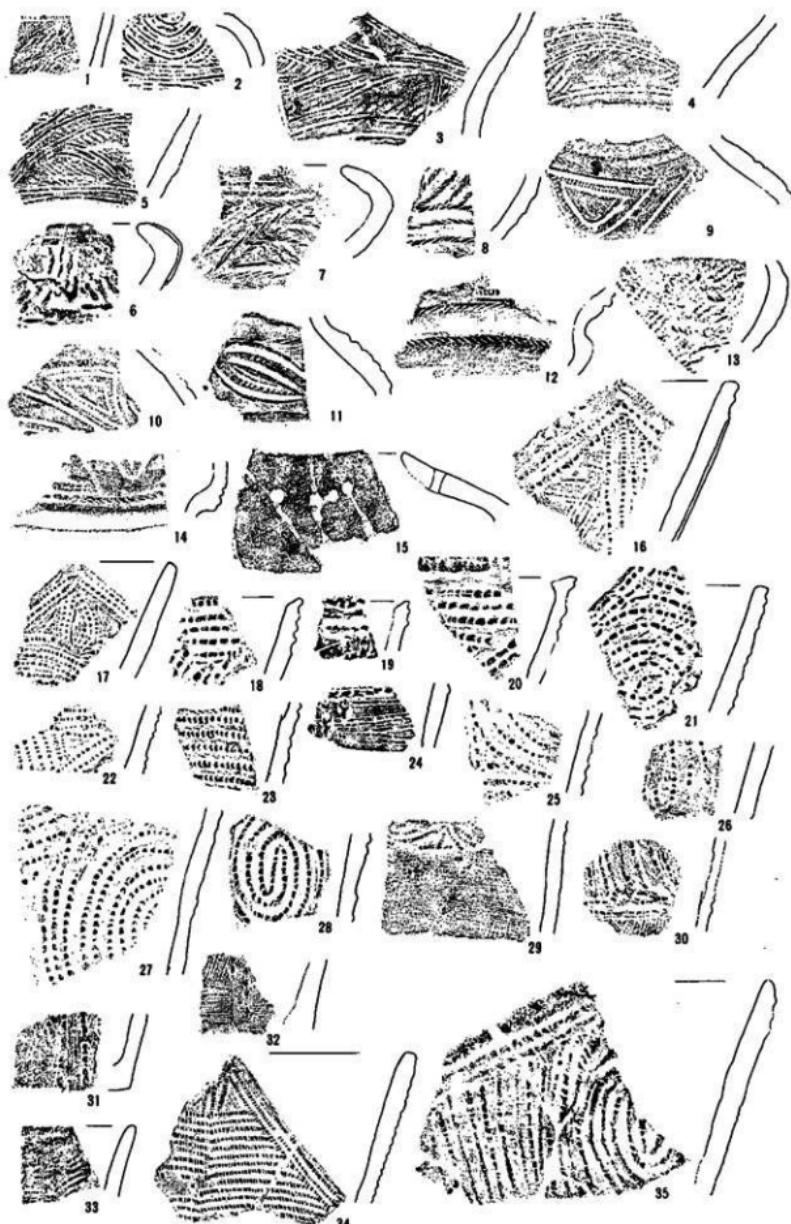
第9号 3号住居址(1~33) 4号住居址(34~43) 出土土器(1/4)



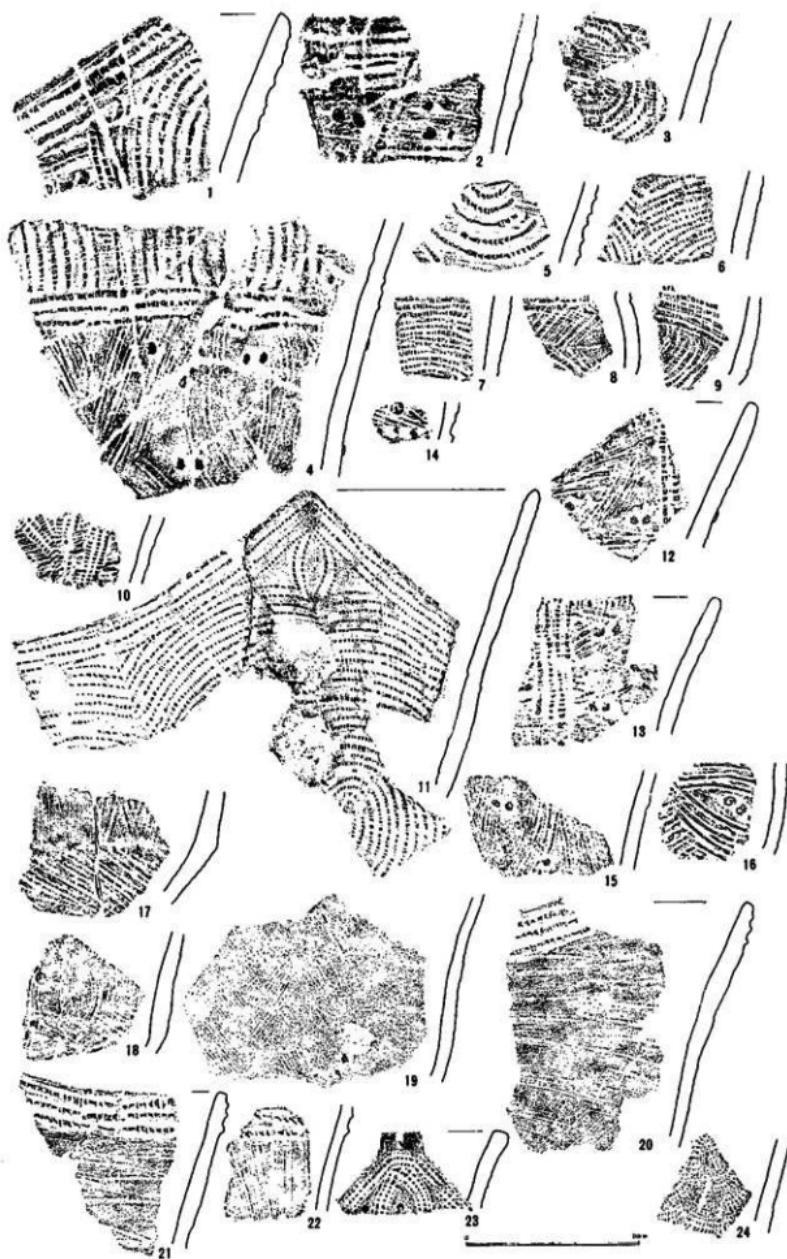
第10圖 4号住居址（1~24）5号住居址（25~27）壠立柱建物1附近（28~30）出土土器（%）



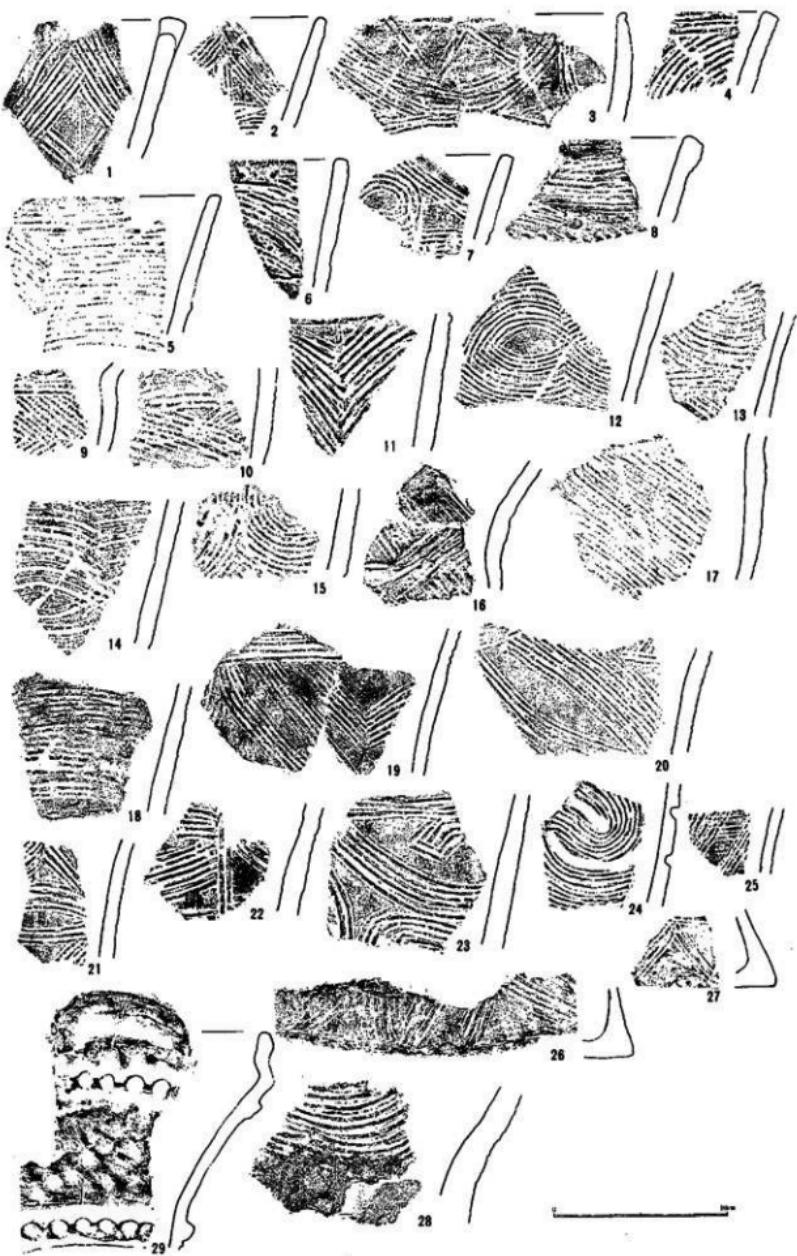
第11図 堀立柱建物 1 附近出土土器 (16)



第12図 遺構外出土土器(1)



第13図 造構外出土土器 (少)



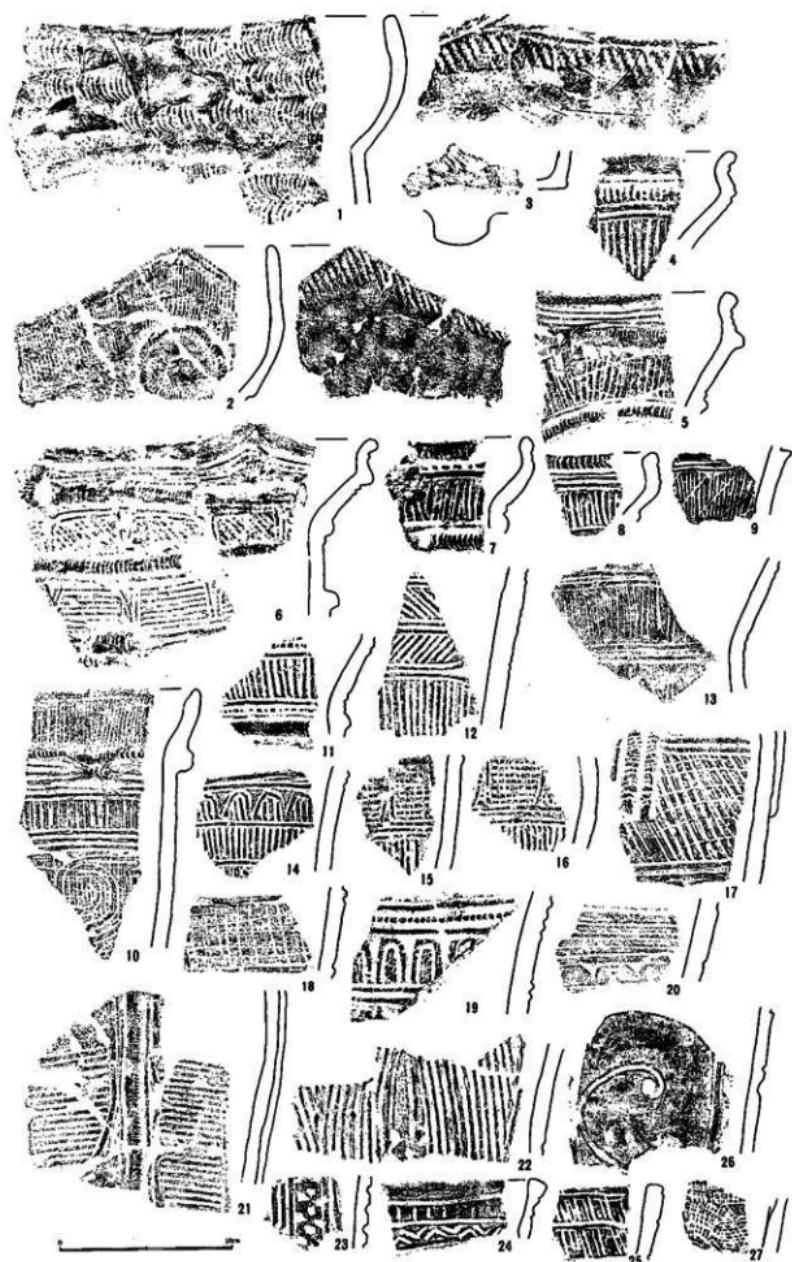
第14図 遺構外出土土器(%)



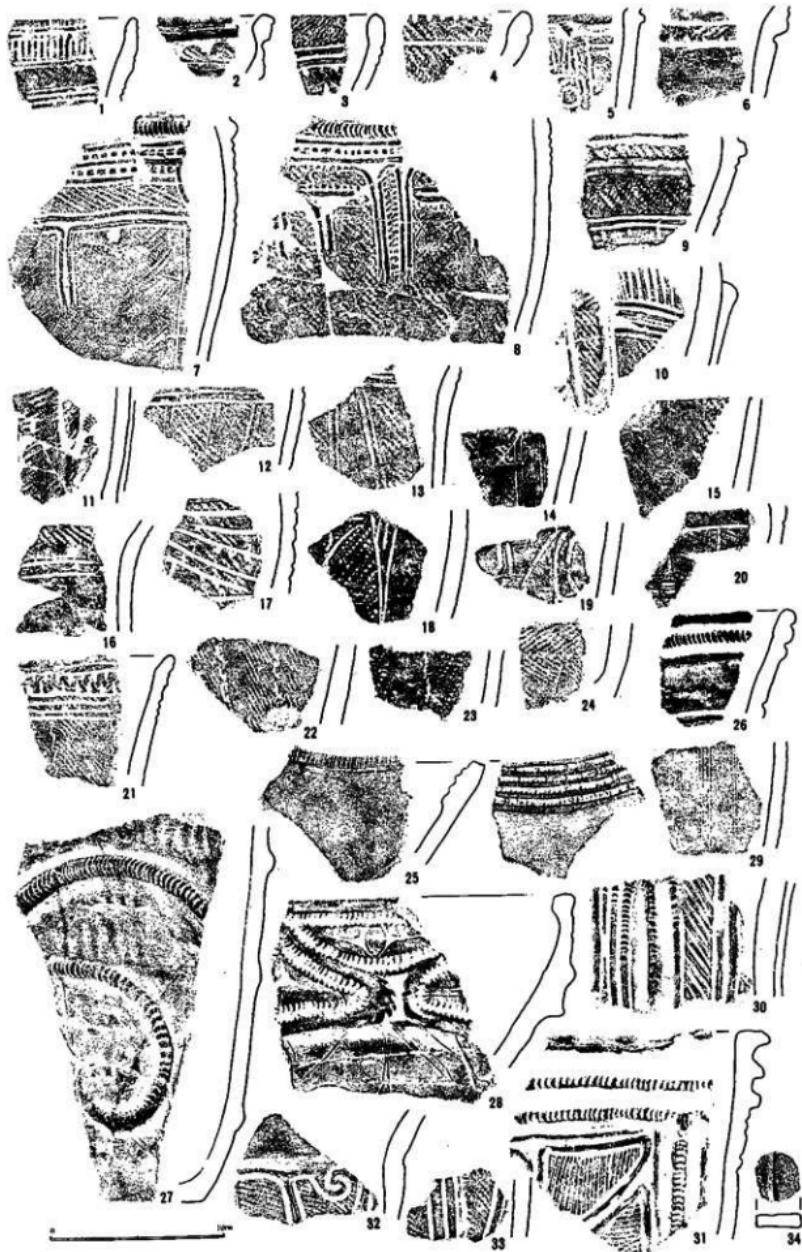
第15図 遺構外出土土器(1)



第16図 遺構外出土土器(%)



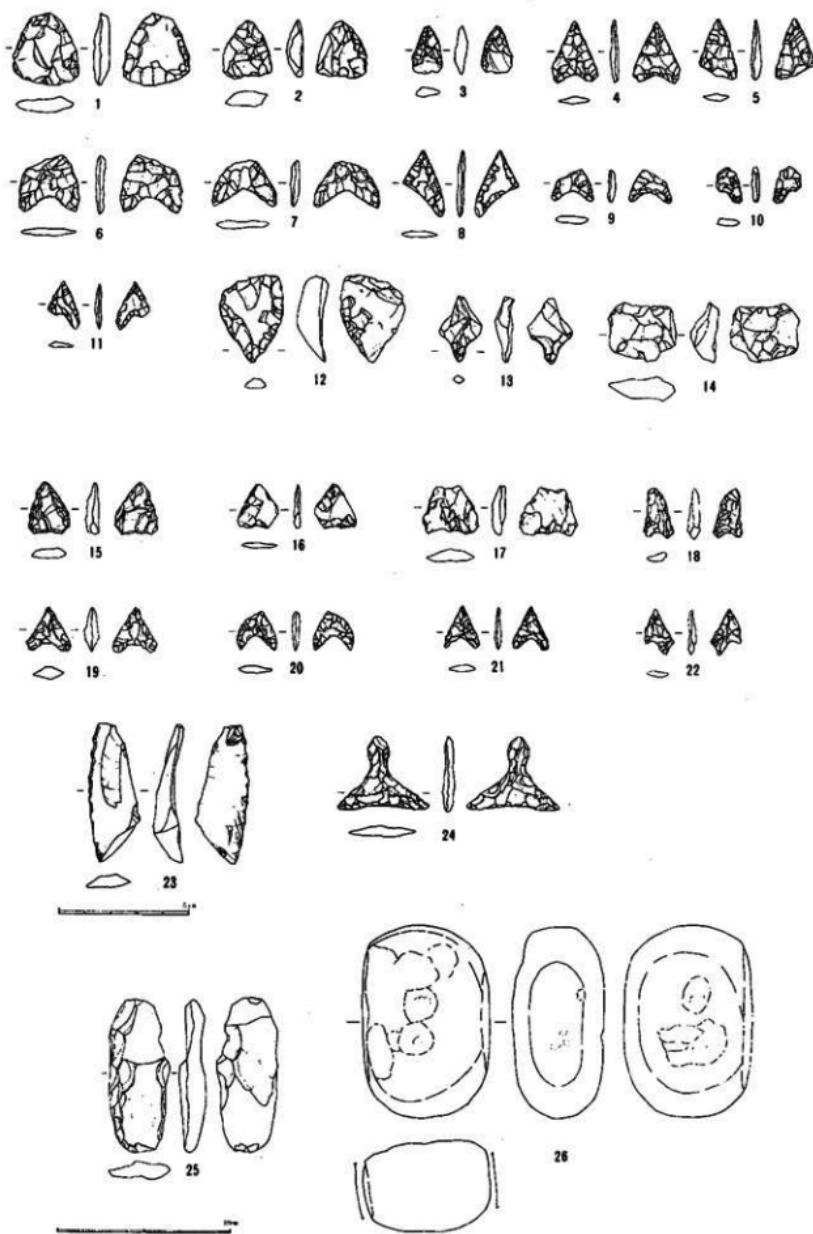
第17図 遺構外出土土器(15)



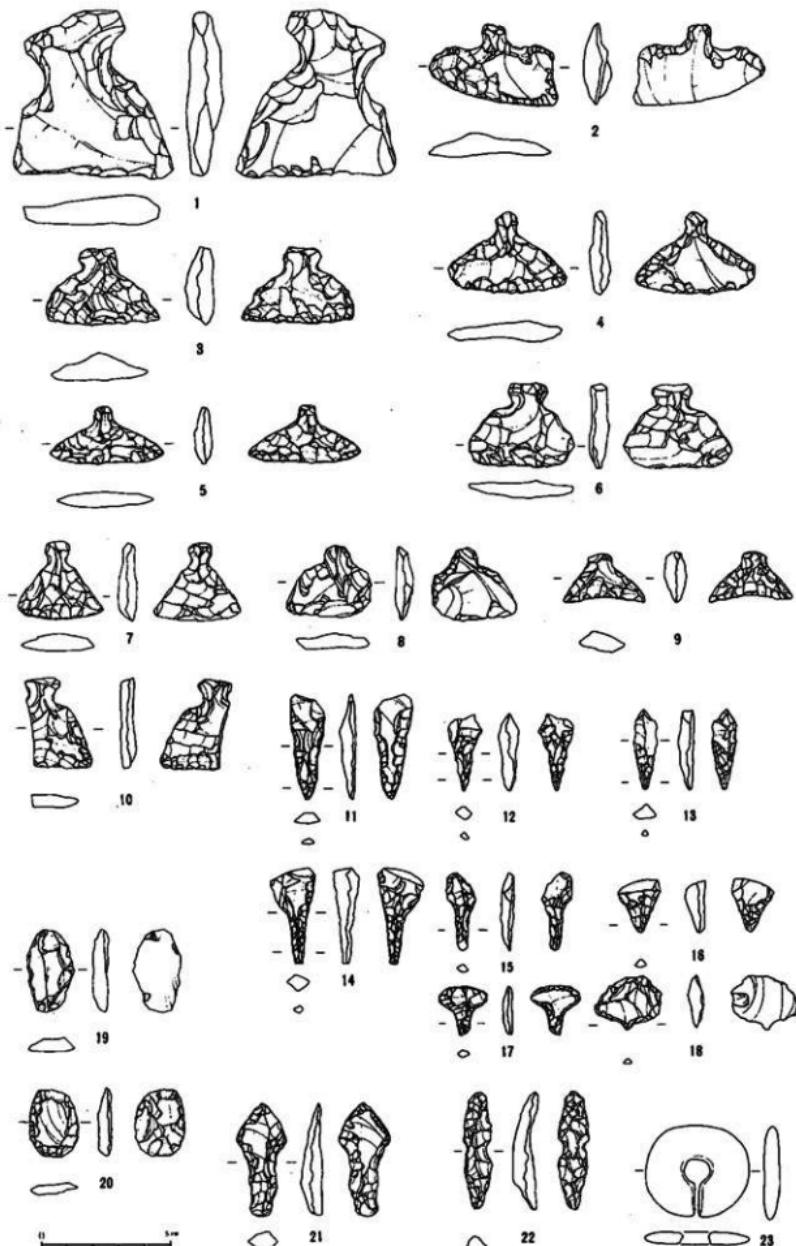
第18図 遺構外出土器(少)



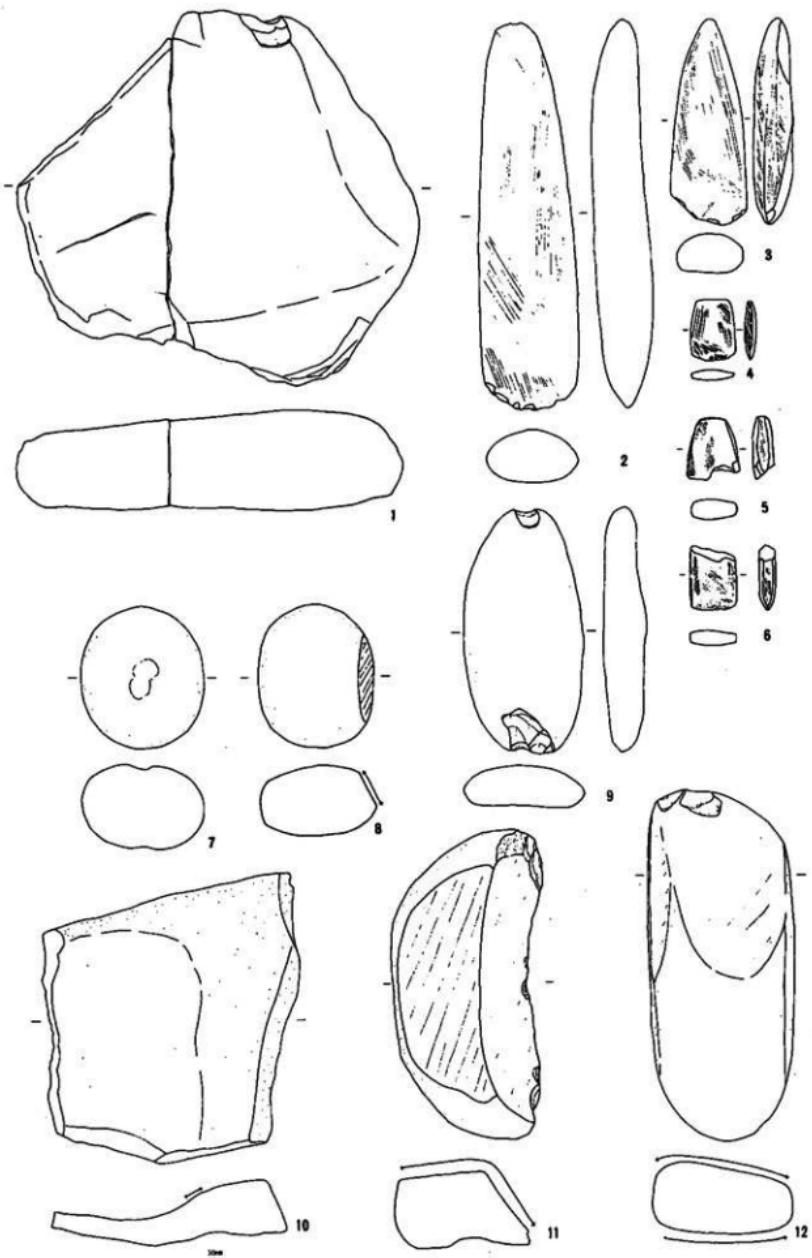
第19圖 3号住居址出土石器 (1~20%, 21~25%)



第20圖 4号住居址出土石器 (1~14号) 5号住居址出土石器 (15~24号, 25, 26号)



第21図 造構外出土石器 (1/2)



第22図 5号住居址(1, 1/2) 遺構外出土石器(2~12)

第1図版 遺跡遠景



第2図版 調査中の遺跡



第3図版 1号住居址

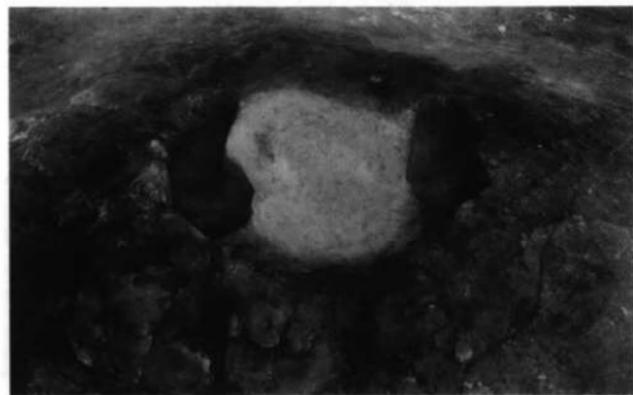


1号住居址全景



1号住居址カマドと柱穴

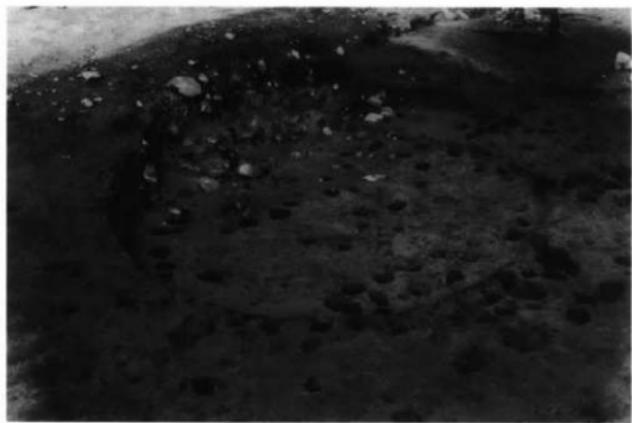
第4図版 2号住居址



第5図版 3号住居址



礫の投げこみ（流れこみ）

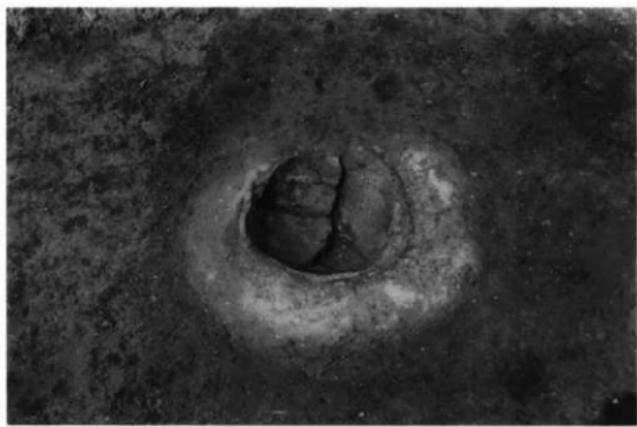


3号住居址全景

第6図版 4号住居址



4号住居址全景（試掘で北壁がほられる）



4号住居址埋廻炉

第7図版 炉と埋甕



5号住居址埋甕炉



屋外埋設土器

第8図版 堀立柱建物1

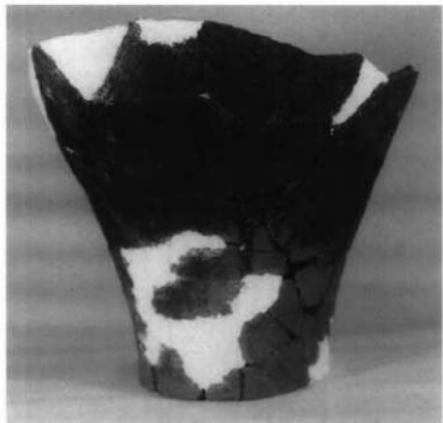


柱穴の状況

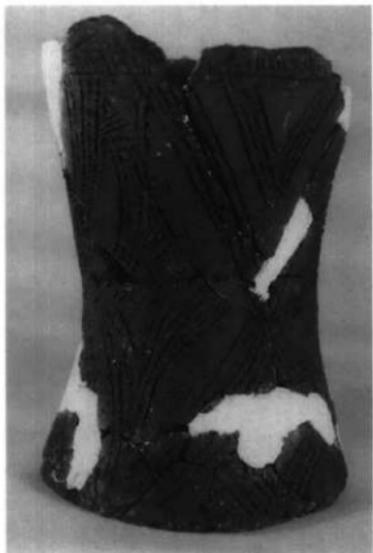


1間×3間の堀立柱建物1

第9図版 土 器



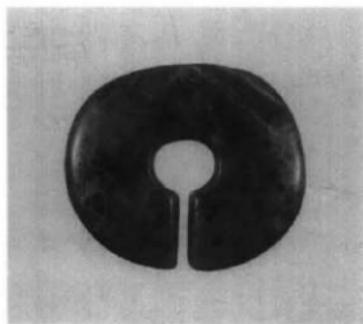
第10図版 土器と玦状耳飾



遺構外



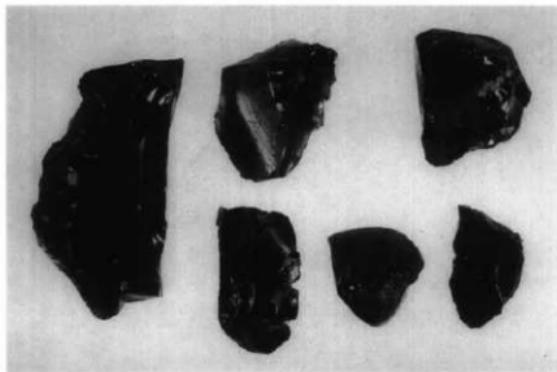
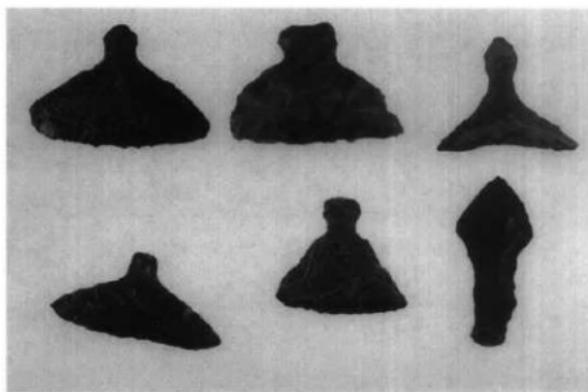
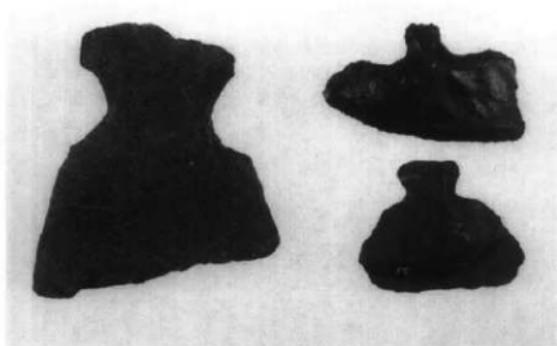
屋外埋設土器



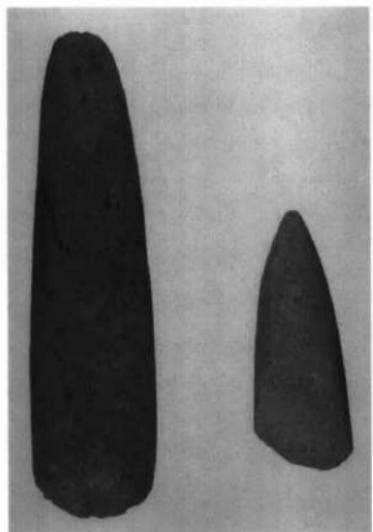
玦状耳飾（表・裏）



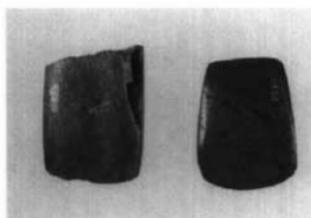
第11図版 石ヒと原石



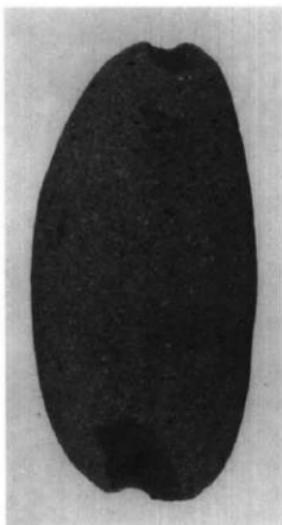
第12図版 石 器



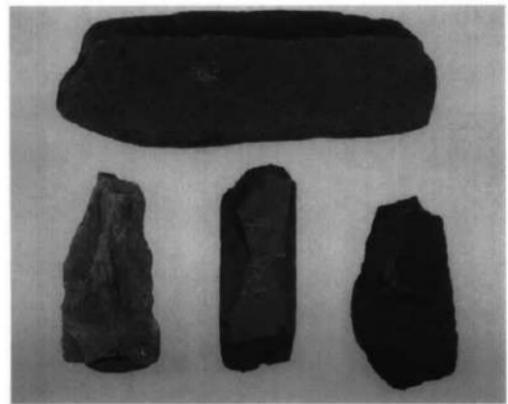
磨 製 石 斧



磨 製 石 斧

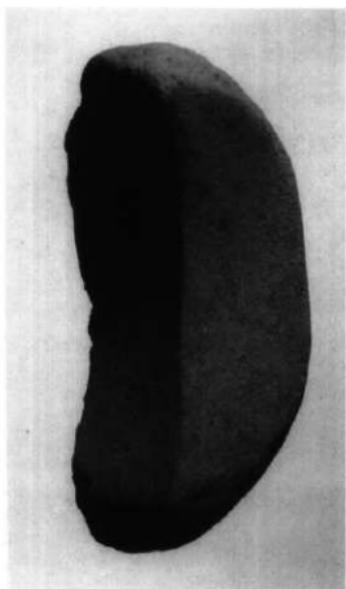


石 錘



横刃型石器と打石斧

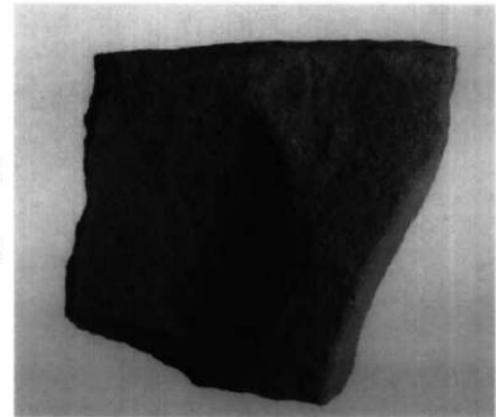
第13図版 砥石と石皿



砥



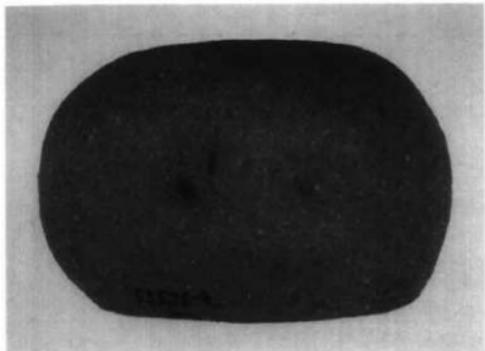
石（表と裏）



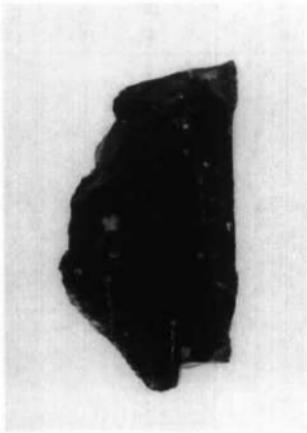
石

皿

第14図版 凹石と原石



凹石・磨石(表・裏)



黒曜石原石(表・裏)

水無神社附近遺跡調査概要(抄録)

フ リ ガ ナ	スイムジンジャフキンイセキハックツチョウサホウコクショ
書 名	水無神社附近遺跡発掘調査報告書
主 著 者	神村 透
発 行 者	長野県土地開発公社、木曽福島町教育委員会、木曽郡町村会
編 集 機 関	木曽郡町村会
住 所 ・ 電 話	木曽郡木曾福島町大手 0264-22-2329
印 刷 所	トキワ印刷株式会社 木曽郡木曾福島町本町
印 刷 日 ・ 発 行 日	1996年3月10日、1996年3月25日
所 在 地	長野県木曽郡木曾福島町伊谷1134~1150番地
25,000分1 地図名・位置・標高	木曾福島、北緯35° 50' 40"、東経137° 42' 45"、標高810m
概	主な時代 繩文時代前期後半から中期中葉 平安時代
	主な遺構 繩文時代前期後半~中期初頭の住居址3 平安時代住居址3
要	主な遺物 石器(块状耳飾、石鎌、石匕、打石斧、黒曜石原石等) 土器(諸磧b式、北白川下層式、諸磧c式、大歳山式、十三菩提式 五領ヶ台式、船元式、北裏式)
	特殊遺構 屋外埋設土器
	特殊な遺物 瓢状耳飾
調査機関	1994年5月18日~8月26日

水無神社附近遺跡

平成8年3月10日 印刷
平成8年3月25日 発行

発行 長野県土地開発公社
木曾福島町教育委員会
木曾郡可村会
印刷 トキワ印刷株式会社
(0264) 22-2228

